

8 章 ディテールが作る街

／尾道斜面地住宅の建築マナー

- 8-1 研究対象地の概要
- 8-2 斜面地住宅の建築的特性
- 8-3 斜面地住宅の建築マナー
- 8-4 ディテールのリスト



高台の洋館

冒頭写真は、昭和戦前に建てられた高台の洋館を、望遠レンズで捉えたものである。個々の住宅の外観は、細街路ゆえにほとんどの事例でカメラの引きが得られず、撮影できないから、斜面地に広がる住宅群は、外観の無い断片的特色の集まりとして存在するのである。その全容はジグソーパズルのように、目に入った断片を繋ぎ合わせてイメージするほかはない。カタチが後退し、代わってディテールが視覚対象を形成する街、これもまた都市のインテリアの主要なケースではないだろうか。



尾道斜面地住宅の建ち方（作法という意味も含めてマナーと呼んでみたい）について、支部会員の一人が詳細な現況調査を実施している*¹。居住者の属性、敷地面積・部屋数・階数等の数値、そして斜面を経巡る細街路（7章共有する道）への接し方、対し方は、＜都市のインテリア＞の一ケースとして捉ようとしている尾道坂の街の輪郭を描き出すために、ぜひとも必要なジグソーピースである。

* 1. 「尾道市の斜面地住宅の増改築と法面との関係とその隙間の使い方に関する研究」平田圭子・大畑優志郎（広島工業大学大学院）、日本インテリア学会論文報告集 23 号、2013 年 3 月

8-1 研究対象地の概要

歴史的沿革

研究対象地は尾道市の斜面地、西土堂町～東土堂町である。歩くのは大変であるが、標高にすると高々50mほどの、少し東に開いた南面斜面である（後掲地図）。

尾道坂の町の歴史的沿革

西暦・年号	(出典: http://bisan.co.jp/shop/page/onohistory.html)
616	聖徳太子により浄土寺が創建されたと伝えられる
730 天平年間	西國寺創建される
806 大同元年	良神社、千光寺創建と伝えられる
1168 仁安3年	「尾道村」を備後太田庄の倉敷地として申請、認可され、尾道港が公認の港となる
1327 喜歴2年	浄土寺再建され、この時代から室町時代にかけて海運、商業隆盛
1420 応永27年	朝鮮通信使船往復とも尾道へ寄港
1451 宝徳3年	対明貿易船団(10隻編成)尾道で輸出物資積み込む
1454 亨徳3年	天竜寺船団尾道籍の船が加わり、対明貿易の一拠点となる
1659 万治2年	市内71ヶ寺となる
1672 寛文12年	河村瑞軒により西廻航路が開かれ、尾道に再び活気が戻る
1766 明和5年	問屋役場開設
1819 文政2年	尾道～大阪間に定期船便始まる
1884 明治17年	大阪商船会社の汽船の寄港地となる
1891 明治24年	山陽鉄道(福山～尾道)間開通(尾道駅開業)
1892 明治25年	山陽鉄道(尾道～糸崎)間開通
1897 明治30年	(尾道～今治)航路開通
1898 明治31年	広島県内で二番目に市制施行
1925 大正14年	尾道市上水道完成し、給水始める
1927 昭和2年	第二種重要港湾、尾道糸崎港の指定を受け、開港場となる
1951 昭和26年	国道2号線開通
1961 昭和36年	山陽本線(岡山～糸崎)間電化される
1972 昭和47年	尾道バイパス全線開通
1988 昭和63年	山陽新幹線新尾道駅開業
1991 平成3年	生口橋開通。マンション建設予定地(久保3丁目)を尾道の精神的市民で構成される「尾道の歴史的景観を守る会」が3億5千万円で買収し、建設を阻止
1998 平成10年	市制施行100周年。しまなみ海道(西瀬戸内自動車道)が開通

以下に尾道市史の概要を記す。江戸期、斜面地には寺社のみがあったとされる。最盛期には83カ寺を数えたが、その後多くが廃寺され、現在は25カ寺となっている。斜面地の地主は今も大半が寺社である。1891年(明治24年)に山陽鉄道が開通し、1951年(昭和26年)に国道2号線が開通したことにより、路線地居住者の立ち退き代替地として斜面が当てられ、また商いで成功を収めた人々も別荘地を求めたので、斜面地は新興の住宅地別荘地としておおいに栄えた。当時は八百屋や魚屋などの商店も存在した。斜面地の住居数は400世帯以上とされており、現在はその半数が空き家である。

尾道市では、平成18年(2006年)に旧尾道市及び向島町を対象区域とした「尾道市景観計画」「尾道市景観地区」を定め、平成19年4月1日から施行している。「景観計画」の区域と「景観地区」において、良好な景観を形成するため建築行為などに関する

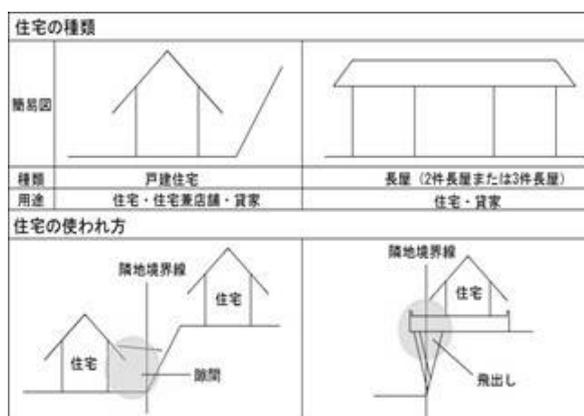


尾道市斜面地住宅地地図

る基準を定め、建築物の高さ、面積、外観の変更または色彩を制限している。とはいえ、市政のみの空き家再生には限度がある。尾道市はこのNPO法人と協働して「尾道市空き家バンク」による空き家情報を公開し、「空き家再生促進事業」による助成金を支援するなど、空き家再生の促進を図っている。

斜面地住宅の概要

斜面地住宅（以降、住宅と記す）の種類を以下に挙げる。住宅の種類としては戸建住宅と長屋の2種類が確認できる。戸建住宅には住宅・住宅兼店舗・賃貸住宅があり、長屋は元々賃貸住宅であるが、一部は分譲されている。



斜面地住宅の概念的種別

住宅と法面の隙間や隣地の法面との間（法面は隣地である）を倉庫として利用している住宅や、宅地拡張が隣地境界線を超えている崖上住宅の事例が確認できた。

斜面地の地形的特徴の概要を記すと、高台を東西に横断する山ノ手道で斜面勾配は二分される。山ノ手道南側の傾斜勾配はせいぜい0.2(角度10°)どまり、しかし北側の傾斜勾配は0.5(角度30°)を超える。勾配の突然の変化から見ても、山ノ手道が寺社の所有する段畑(果樹園か菜園)とその上に広がる山林との境界(山際)を走っていたことは明らかである。山ノ手道北側の当時新興住宅地(あるいは別荘地)の大きかりな石垣の築造を見ると、今日の住宅地開発に匹敵する宅地造成工事が人力で行われたことが分かる。また山ノ手道の南側においても、斜面勾配には違いがある。千光寺参道、新参道が設けられている東側地域の勾配が最も緩く、まずこの地域から宅地化が進んでいった様子が推察される。

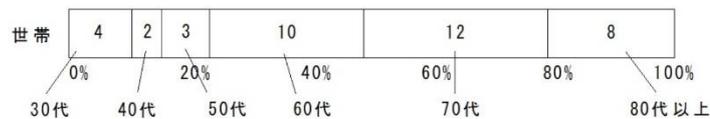
ヒアリング調査

斜面地住宅の概要にかかるヒアリング調査は、2011/10/19(水)～10/21(金)、10/26(水)～10/28(金)の系6日間にわたって実施した。調査対象は尾道市西土堂町～東土堂町の、事前にヒアリングの了解が得られた39世帯である。ヒアリングの内容は、1. 居住者の属性、2. 敷地の所有者、3. 住宅の概要、4. 住宅の増改築、5. 住宅と法面との隙間の使い方の5項目である。

8-2 斜面地住宅の建築的特性

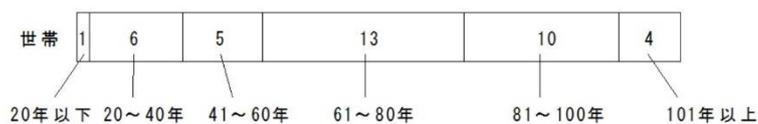
居住者の属性

居住者の年代は、80代以上8世帯、70代12世帯、60代10世帯と77%が60代以上である。



居住者の年代 (N=39)

家族構成は1人暮らしが9世帯、2人暮らしが20世帯と大半をしめる。居住者は長期に渡りそこで居住し、高齢化していることが垣間見られた。

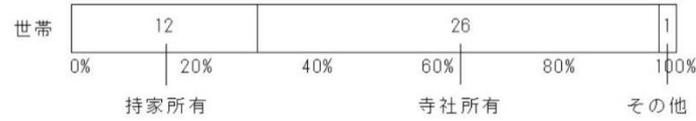


居住者の家族構成 (N=39)

敷地の所有者

土地の所有者は39世帯中26世帯と66%が寺の土地であり、光明寺7世帯、持光寺9世帯、天寧寺5世帯、宝土寺5世帯とそれぞれの寺の周辺一帯が寺の所有になっている。住宅は84%が持家である。住宅の築年数は、61～80年が13世帯、81～100年以上が10世帯、101年以上も4世帯と、築年数が長い。しかし、居住年数をみると世帯に

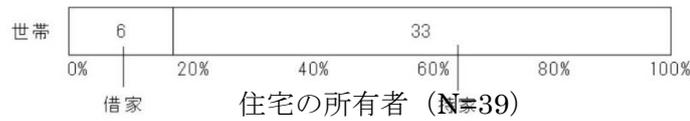
よって異なり、親の代から住む人も、中途から中古物件を購入して住む人もいる。



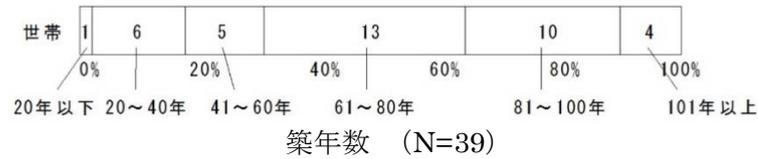
敷地の所有者 (N=39)



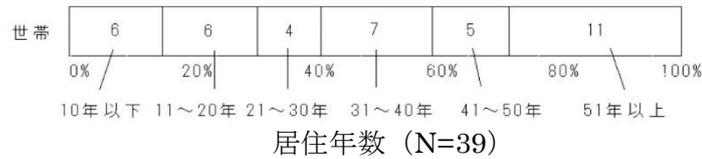
寺社別土地所有 (N=26)



住宅の所有者 (N=39)



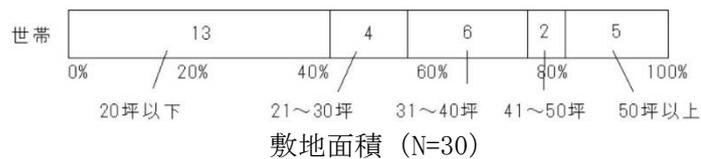
築年数 (N=39)



居住年数 (N=39)

傾斜地住宅の概要

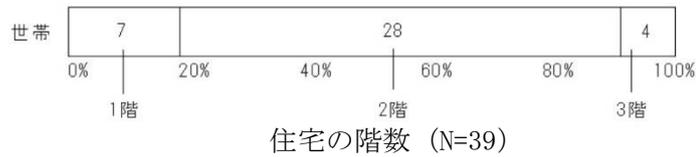
敷地面積については、回答があった30戸のうち20坪(66㎡)以下が13戸40%、30坪(100㎡)以下が17戸56%と狭小敷地が半数を占めているが、50坪(165㎡)以上も5戸17%もあり、また回答に加わっていない名家の大邸宅も、この地区には多数建っていたのであるから、陋屋住宅地などでは決してない。平成25年度の住宅統計を見ると、住宅敷地面積の全国平均は260㎡(78坪)と斜面地のそれを上回るが、最多値は100㎡~300㎡の範囲にあるので、印象的には今日の住宅と大きな差はない。



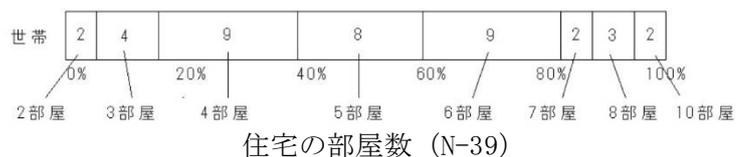
敷地面積 (N=30)

階数をみると、3階までである内、2階建てが71%と大半を占める。山の手道の下に建

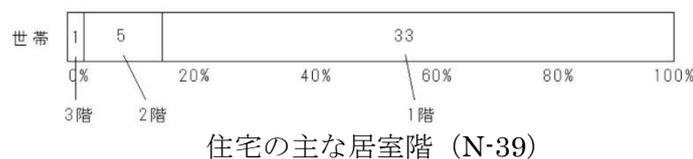
つ住宅には、2階から出入りするものも見られるのであるいは出入りの便宜のためかーとの想像も生まれるが、次の部屋数の統計を見るかぎり、貴重な敷地面積に対する部屋数重視が、2、3階建てを選んだ主要因であると考えるのが妥当なようである。



相続した住宅の延床面積を把握している住人は少ないので、この調査では住宅規模として部屋数を尋ねている。今仮に 100 m² (30 坪) の敷地に建てた 2階建て住宅の延床面積を 100 m²と仮定すると、部屋数は 4 部屋である。斜面地では 5 部屋以上の住宅が大半を占めるので、家族数が多い、部屋数重視のプランが大いに推奨された時代背景が、部屋数データからはうかがわれる。



斜面地に建てられている住宅は、玄関が 2 階に位置することもあるので、主な居室階についても尋ねている。3階を主とする住宅が 1 世帯、2階を主とする住宅が 5 世帯あり、斜面地住宅の地区的特性として興味深い。



以下に要約する。敷地面積、部屋数等、住宅規模については平均を求めることが無意味なほど格差が大きい、そのことも含めて今日の住宅統計と大差ない。大半が二階建てである。ほぼすべてが持ち家であるが、敷地はなお寺社所有が多い。老朽化か伝統化かは別にして、大半の住宅の築年数は古い。斜面地住宅ゆえか、2階3階を居住階とする住宅が少数ながら存在する、等々。

8-3 斜面地住宅の建築マナー

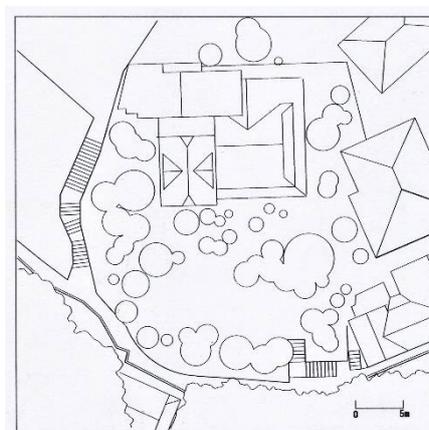
住宅が前面道路にどのように相對しているかによって、住宅地の在り様スタイル

が決まる。見えるのは門扉と木立のみ、中の生活はうかがい知れないのがお屋敷街であり、路地を使わないと生活の用が足せないほど狭小な住宅地が長屋街であろう。幅員6mの車道で幾何学的に区画され、メーカーがシェアを競う郊外住宅地は、ライフスタイルも販売する展示場型住宅街であろう。では都市のインテリア型と呼ぼうとしている尾道の斜面地住宅は、〈共有される道〉と定義した細街路に対して、どのような作法、マナーで建っているのだろうか。

冒頭で述べたように、坂の町の住宅は全体が見えない。見えないカタチに代わる多様なディテールを通して、その建築マナーを概観してみよう。

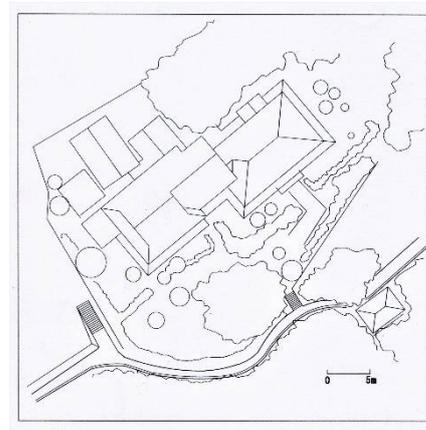
〈高台の邸宅〉

山ノ手道の北側に高々とそびえる石垣の上には、別荘風の洋館や茶園と美称される和風邸宅がいくつか見られる。その中のひとつ三軒屋の洋館は、遠望できるので散策者には印象深いのが、近づくにつれて見えなくなる。航空写真によって全容を確かめると、下右図の配置で建っている。平入り和風邸宅と直角に洋室書斎（応接間）を配置した、大正期から昭和戦前に流行した典型的な和洋折衷近代住宅である。立派な前庭を設けるために建物は路から大きく控えて建てられているので、道路からは破風の頂部しか見えない。



同配置図の右下の隣家（後述）は、やはり大正昭和戦前に流行したニコイチ長屋*²タイプの文化住宅である。この例を見ても、高台の住宅はモダン住宅という点では共通しているものの、必ずしも高級住宅地とした開発されたわけでもないことが分かる。

東土堂の山ノ手道北側に建つ尾道文学館は、別邸風和風住宅（茶園）の転用事例である。平屋なので外観はまったく見えない。理由は不明であるが、門扉のデザインは数寄



屋門や冠木門ではなく、簡素な洋館風の石柱と門扉である。

両邸とも道路に表されたディテールは、階段アプローチと鉄製門扉のみである。高台が近代化イコール洋風化であった時代の気運を率直に表現しているものといえよう。

* 2. ニコイチ長屋 Semi-detached House

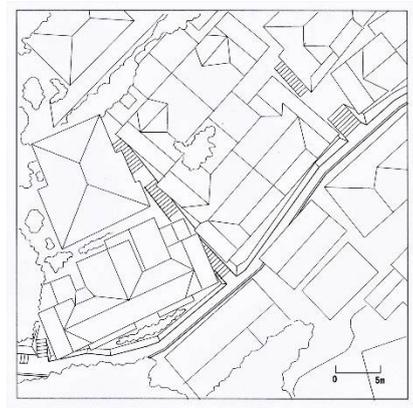
二戸一住宅。民間で派生したアノニマス住宅に思えるが、実はイギリスを代表する都市計画家レイモンド・アンウィン（1863-1940）が実現に力を注いだ田園都市（エベネザー・ハワード）の中核を成す労働者向け住宅モデルである。今日もなお多くが残って、イギリスの郊外で散見できる。

アンウィン推奨のニコイチ住宅は、離れて見ると一軒の中流邸宅に見えるようにしつらえてあるが、尾道の文化住宅はそれとは逆に、二軒に見えるようデザイン上の分離が工夫されている。



<高台の文化住宅>

西洋館の東隣りには、ニコイチ文化住宅が数軒蝟集して建っている。接道条件から言えば、山ノ手道に面しているのではなく、傾斜面に対して直交して設けられた階段路地に面して建てられている。右図東側の階段路地（写真右）から出入りする大屋根の家は<津留邸>といい、空き家再生プロジェクトに取り上げられ、修復を受けて公開されている。東西住戸は棟の部分で分かれているという。



右側俯瞰図を一見すると分かるが、高台の文化住宅は平入り和風平屋の両端に、直角に洋風書斎・応接間が配置されたものであり、西隣りの洋館と構成は同形である。切妻屋根の洋室、シンメトリーな窓、ロフトの存在を暗示する採光窓、モルタル壁、ペンキ

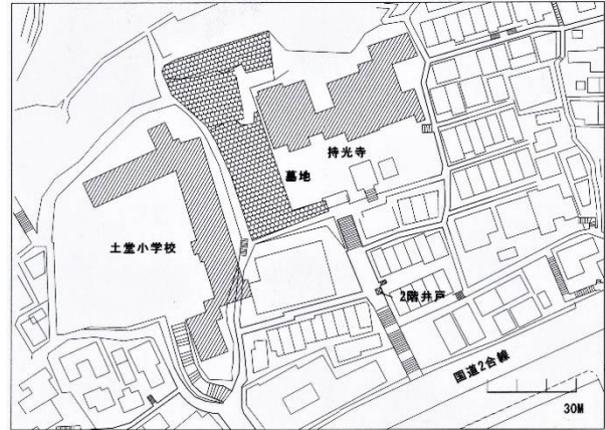


空き家再生プロジェクト
HP から引用

塗りの外壁羽目板等々のディテールが、長屋住民が受け取った近代化のメッセージだったのであろう。今日では斜面地住宅の歴史的遺構として、訪れる散策者を楽しませている。

<高台の小学校と平地の長家>

傾斜面の勾配を測った東土堂街では（前掲地図）、山ノ手道は字句通り山ノ手を走っているけれども、西土堂町ではかなり南下して標高を下げ、広大な敷地を持つ土堂小学校と持光寺と墓地の下、南側を迂回している。古くから住宅が這い上がる谷あいの土地なので傾斜が緩く、まとまった広さで整地され、そこに平屋の長屋街がある。等高線に沿って建てられているので敷地内は平地であるが、長屋と長屋の間には段差 2m 程の石垣がある。



上右図持光寺の門前には、今は貴重な歴史遺構となっている、段差のある二つの長屋で使える「二階井戸」がある。長屋は井戸やトイレが共同なのが本来の姿であり、この長屋の起源が江戸期にあったことがうかがえる。写真に見える後付の水道配管を見ると、二階井戸は戦後もしばらくは現役であったのではないか。今は大半が空き家である。



り、残って住む人は二階建て住宅に建て替えている。

やや緩い傾斜地とはいえ、土堂小学校と持光寺は地図に記入されている 2m 差の等高線を数本束ねて造成した高台に建っているのです、標高差は 10m を超え、山ノ手道からは門しか見えない。



共同井戸の長屋も建築史上、民俗誌上で正当な評価を受けるべき住宅であるが、当地のそれは戦後のある時期に急増する労働人戸に対応して応急的にたてられたバラックであって、無人となった今はカメラの対象にはなり難い。クルマが入れる地域なので拙速な開発の可能性があって、むしろ気になる。

<見下ろされて建つ邸宅>

山ノ手道の上側が新規に宅地開発された山林であったのに対して、その下側の住宅敷地は、寺社が所有する段畑の転用である。住宅地としては必ずしも適地ではないゆえに多くは取り壊されているが、山ノ手道の石垣が庭の向こうに高くそびえる邸宅が、その上の<塀>の長さだけ建っていたーと考えられる。山ノ手道を歩くと、わざわざ瀬戸内の眺望を妨げて建つ塀の「悪意」に驚くが、それは下にそれなりの邸宅が建ち並んでいたからである。山ノ手道の北側は<見えない街>であったが、南側は<見せない街>であった。土塀、レンガ塀、板塀が延々と続く山ノ手道の景観が、これら邸宅の存在を示している。湾曲部の土塀レンガ塀は自立できるが、それができない直線路では、板塀が大がかりな工事によって支えられていた（写真）。玄関は下の路地に設けられているが、山ノ手道にも適宜、二階から出入りできる勝手口が設けられていた。



公開された茶園・帆雨邸の庭から

屋敷街に似た尊大な建築マナーといえるが、許されて中に入ると中は花樹に彩られたパティオ、印象は一転して親しみのある<都市のインテリア>に変わる。引用した帆雨邸については、坂の町随一の名跡<島居邸>として後述する。

<階段道の邸宅>

階段道に高低差ゼロで接する住宅は、階段をアプローチとする別荘風邸宅とは一変して、接道型住宅特有の親しみやすい表情を見せる。千光寺参道には往時の盛況を彷彿

させる茶店「昇福亭」が営業している。料亭風の数寄な門構えを備えているが、今は和菓子を店頭販売する茶店であるから、＜都市のインテリア＞にふさわしい集客ディテールを身にまとっている。



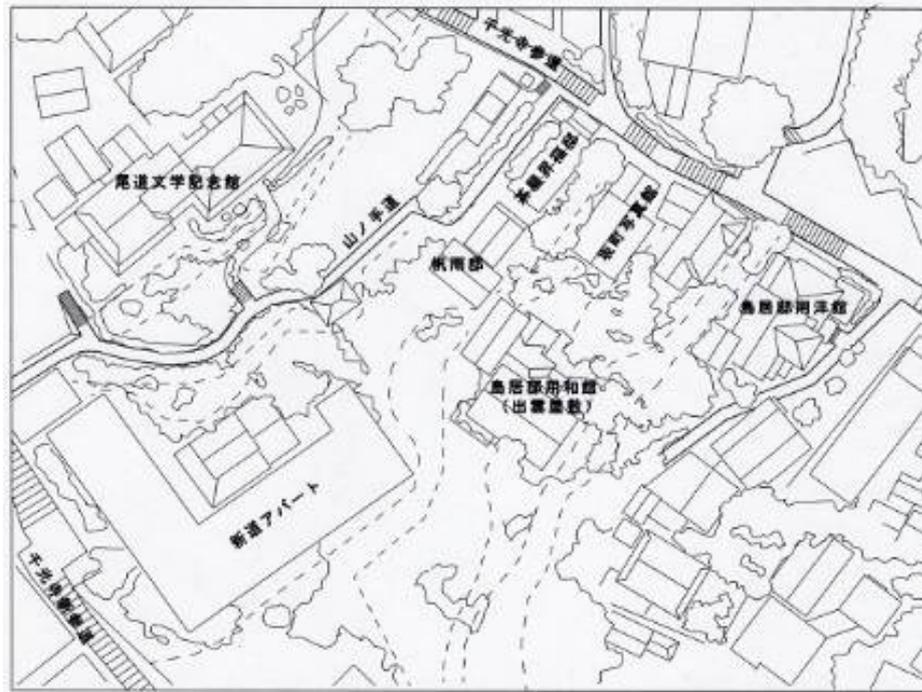
茶屋昇福亭

しかし階段道では門構えのある邸宅は例外的である。大半は店舗兼用住宅か賃貸住宅であり、階段の踊り場から直接引き戸を開けて入る庶民的な住宅である。元は畑のあぜ道であったであろう路地も、できるだけ多くの住宅に公平にアプローチできるよう、細かく枝分かれがデザインされている（下左）。西土堂町の山ノ手道には、北側斜面にも宅地が幾段か造成され、宅地需要の拡がりを補っている（下右、＜高台の文化住宅＞として既述）。



＜すべてを備える島居（しまずい）邸＞

山ノ手道から南側次の等高線道まで、一街区を占める敷地に点在するのが島居邸である（次ページ敷地図）。尾道全盛期の島居家当主、島居幸雄氏（大正4年3月に尾道



島居邸敷地図（周辺を含む）

商工会議所第2代会頭に就任—と同ニュースにある）が出雲藩の出張所であった出雲屋敷を取得し、今は旅ナビで評判の島居邸西洋館を建てた。千光寺参道に接した敷地に控えを省いて建てられているので擬洋風の外観が道行く人に強くアピールする。ここだけ見ると住宅展示場の光景のようである。



出雲屋敷は敷地図で分かるように深い木立に埋もれ、今も昔も外観は見えない—とい意味で、存在がインテリアなのである。後継者も歴史遺産ゆえに安易に住まうこともできず、永い間空き家となって荒廃が危ぶまれていたが、現在は伝統和風のインテリア

を活かしてレストランに転用され、観光尾道事業の一角を担っている。

〈見下ろされる邸宅〉の事例として挙げた帆雨邸の前身は、島居邸出雲屋敷の納屋である。島居幸雄氏はここを私的な書斎として使用していたとのこと、帆雨（はんう）とは氏の俳号である。残された蔵書は尾道文庫として公開されている。多くの客は庭で喫茶を楽しむが、望めば幸雄氏が至福の時間を過ごした奥の小室で、コーヒーを飲みながら尾道水道の風光を楽しむことができる。

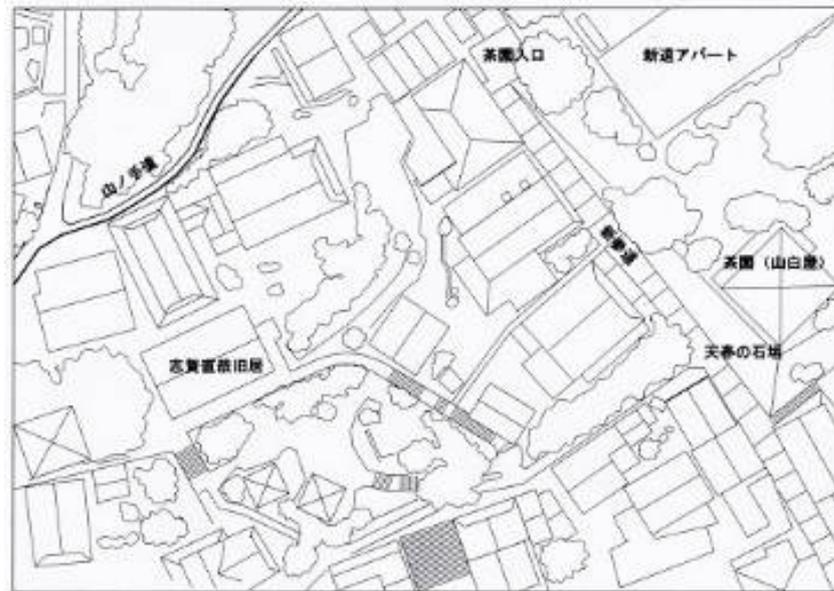


以上見てきたように、島居邸には坂の町で見ることができるすべての住宅タイプがある。サービス施設への転用によって、誰でも見て触れることができる〈都市のインテリア〉となった。

〈畑の中の志賀直哉旧居〉

山ノ手道、新旧千光寺参道、それらから派生する取り付き道路に相對して、それぞれのマナーで建てられた住宅の事例を見てきた。これらは国道2号線と国鉄山陽線の敷設のために生じた緊急的な住宅需要を満たすものであり、前面道路に対して、元の街での建築マナー（階層性の存在が想像される）を応用しつつ、真剣に相對してきた様子がかがわれる。しかし、現在、志賀直哉旧居として観光客に開放されている住宅（次ページ敷地図）は、例外的に〈すべて見える住宅〉でありながら、どこにも見せる意図や気構え感じられない。なぜか、何か。





志賀直哉旧居ほか

敷地図をよく見ると、旧居の背後には山ノ手道からく見下ろされて>建つ立派な農家風の屋敷が控えており、旧居はその庭先に建てられたものであることが分かる。公園となっている土地は元々、そして最近まで畑地だったに違いない。とすれば旧居は、風流をたしなむ屋敷当主の離れであったのではないか。あるいは尾道市が招聘する文士を迎えて家賃収入を得るための借家だったのかもしれない。とすれば、旧居は素晴らしい主を得たことになる。

<天春の茶園>

新参道から志賀直哉旧居へ向かう路地の反対側に、城址かと思間違えるような立派な石垣がそびえ、他のものとは一線を画する住宅ディテールを、探索者に提供している。「天春の石垣」という俗称の由来を解説する表札によれば、大正初期に尾道で乾物商を営んでいた天野春吉氏が別荘として造ったもの—とのことである。茶園を拓く風流と、敷地を確保するためとはいえ等高線を数本（5、6本）まとめ、小学校が建つほどの広大な敷地を造成する石垣フェチとが同一人物に備わっていたわけ、ともかく名を残す執念が新参道を残した。この道には車が入る。工事用道路として使った後で、石畳に整備して市に寄付した—と表札に記してある。

茶園の玄関は坂を上り、石垣が尽きたところに設けられている。



茶園玄関（アパートの側面が見える）



天春の石垣

戦後、この道路を使って新道アパートと呼ばれる鉄筋コンクリート三階建てのアパートが建った（島居邸式敷地図参照）。造船景気に由来すると思われる人口増の期待が、石垣に匹敵する執念を生んだ。RCアパートは今も現役であり、近所のカフェのブログによれば、修復工事の余波を受けて休業中（2016.9）とある。

<天に至る住宅>

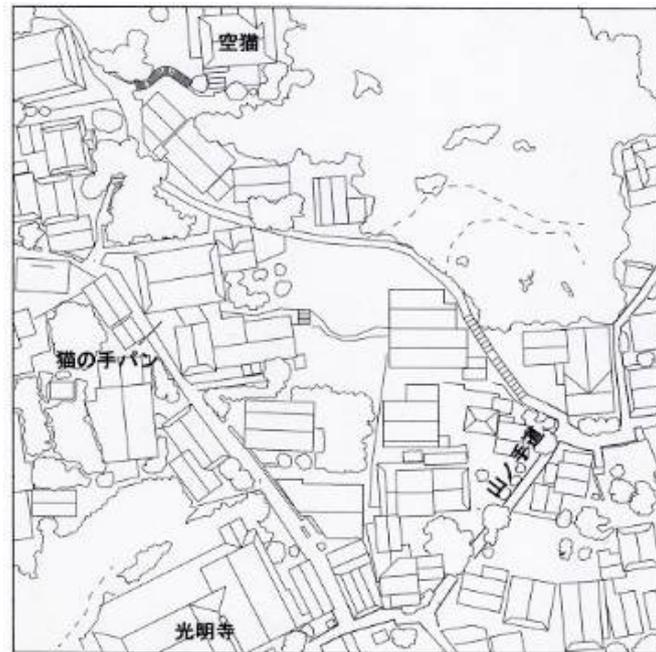


空猫



猫の手パン

光明寺を東へ抜けた山ノ手道に（次ページ地図）に、30cm 四方の「世界一小さな猫の手パン」の看板がある。左折して北へ向かう道は、谷あいの自然集落に向かう上り路である。「猫の手パン」を過ぎるとやがて谷あい路は行き止まり、登山道に変わる。ガイドブックを信じて階段道を上ると、「カフェ空猫」にたどり着く。誰が建てたか集落のてっぺんに、今は人気カフェとなった風雅な屋敷が建っている。実用的とは言えない立地だから、別邸だったのであろう。尾道水道が一望できる縁側で、特製ベーグルを食



高い「空猫」と
小さい「猫の手」

べ、特製のコーヒーを飲む。屋舗の主が求めた愉楽を、今は 1000 円で楽しめる。食べログによれば営業は週末だけとか。

帰りに明朝のパンを買っておこうと「猫の手パン」に寄ると、大概是売り切れている。六畳一間のパン屋、売り場は一畳広さの玄関踏み込みだからストックが少ない。主人は計画生産をしたいので、電話での予約を望んでいる。

これら二件は序で触れた〈空き家再生プロジェクト〉の物件であり、オーナーは共にアーティストである。余談であるが、小説「檜山節考」（昭和 32 年）で作家デビューした深沢七郎が、後に農村に隠遁してラブミー農場を拓いたときの、迎えた農民の言葉「あの人は百姓、私たちは農業ですからー」を思いだす。今で言うアマチュアリズムに当たる。甘えに繋がることばなので濫用は控えるべきではあるが、尾道では業の衰退をアマチュアリズムが補っている。尾道の空き家再生は、アートである。

8-4 ディテールのリスト

意味はディテールに宿るーとの金言が、建築デザイナーの間で言い伝えられている。建築の全容が見えない場合、それらは街のディテールへと転化するのではないか。欧州戦争（第一次大戦）の特需で財を成した、いわゆるお大尽の夢と、戦後の造船景気に一喜一憂した庶民の夢とが、坂の町には混在してきた。そして今は、再発見されてアート

になった。再録してまとめとしたい。

<坂の町住宅のディテール>



結語

住宅評論の本来の役割である住み心地の課題を棚上げして、道や街への（意味付与にかかる）貢献度を付度しているのであるから、本章は前章「共有される道」の住宅編でもある。「パタン・ランゲージ」では、本章の課題をどのように取り上げているであろうか。住宅のディテール（細部）、小空間、小道、立ち止まりたくなる街角等々で目次を検索すると8割方、ほとんどすべてが関連するとになる。しかし見方を絞って、このような難しい敷地に尾道の人たちはなぜ住み着こうとしたのかーとの、本来の素朴に質問をぶつけてみると、以下の3編にヒットした。

PL_39 HOUSING HILL／段状住宅

ミコノス島の白い住宅群などを例に挙げて、住宅密度が一定限度を超えて上がると住宅地は階段状になる必然性があるとして、例えば近隣の交際が深まるなどの空間的特質に言及している。もっとも、尾道と地中海住宅との比較には元々無理がある。地中海住宅の場合は素材が地盤と共通しているが（だから道も壁も白くペイントできる）、尾道の場合は段畑に木造住宅が建っている<だけ>である。

PL_104 SITE REPAIR／敷地の修復

「建物は、最良の土地ではなく、つねに最悪の状態にある部分に建ててゆかねばならない。」

農村では最良の土地は田畑に当てられ、屋敷は山を背に負う、住宅を建てるほかに使い道がないに住宅が建てられる。

尾道の場合はどうだったのか。広域合併がくりかえされた今、住宅適地は他にいくらかもあるように思えるが、国道と国鉄山陽線が開通した当時は、斜面地はかけがえのない土地だったのではないか。執念と思える意志力で段畑やあぜ道は石段で修復 repair され、高密度住宅群を見事に支えている。

PL_168 CONNECTION TO THE EARTH／大地へのなじみ

「家の床を周囲の土地に直接つなげないと、自然から孤立した建物になる。」

緩斜面に広がる「出雲屋敷」で見ると、家の中に実に多くの、和風家屋に多い見切りを兼ねた段差がある。今日的な住宅需要であるバリアフリーとは真逆の価値観が、この斜面地住宅には存在する。